長野県総合教育センター通信

しののめ

2024/03/11
（令和６年３月号）
第１７９号

〒 399-0711 長野県塩尻市大字片丘字南唐沢 6342-4

TEL (0263)53-8802　　FAX (0263)51-1290　　E-mail：sogokyoiku-kikaku@pref.nagano.lg.jp

目　次

「所長挨拶」・・ p.1
「調査研究事業の報告（調査研究Bチーム）」・・・・・・・・・・・ p.2,3
「調査研究事業の報告（調査研究Fチーム）」・・・・・・・・・・・ p.4,5

所 長 挨 拶

「磨かん共に」の精神でウェルビーイングの実現を

長野県総合教育センター所長

変化と改革の令和５年度も年度末を迎えています。総合教育センターの諸事業に対し、ご理解とご支援を頂きましたことに、厚くお礼申し上げます。

今の学習指導要領が実施される中、それぞれの学校でその趣旨を生かした「個別最適な学び・協働的な学び」が推し進められ、探究的な学びの実現に向け、不断の努力がなされています。これらを支える教員研修（先生方の学び）はいかにあるべきか、総合教育センターの大きな課題の一つとして取り組んできています。

「ベストミックス研修」は、参集とオンライン、中堅と若手の世代を超えた研修、長年蓄積されたノウハウとＩＣＴ利用など、それぞれの良いところを取り入れて実施してきました。

昨年は、ＷＢＣ（野球）、バスケットやラグビーなどのワールドカップが開催されました。日本代表の選手が試合に臨む姿をみて、個人やチームとして、様々な分野の中で生き抜いていく大きな可能性と希望をもらったことと思います。この結果は、決して、偶然ではなく大会に臨むにあたって用意周到に準備をしっかりしてきたからだと思います。

教育も同じように、日々の積み重ねが大切だと考えます。子どもたちを中心において、学校や保護者、地域の皆さんと共に教育活動を進めています。今まで継続してきていることはもちろんのこと、新たな活動についても、持続可能な教育として取り組んで欲しいと願っています。

これからは、予測できない未来や社会の変化に受け身で対処するのではなく、きちんと正面から向き合い、自らの実力を発揮し、よりよい社会と幸福な人生を自ら創り出していくことが必要となります。

そして、学校においては、子どもたち一人一人の可能性を伸ばし、新しい時代に求められる資質を育てていくことが大切になります。

センターでの研修が先生方に広く開かれ、教員同士の個別最適で協働的な学びの場となるよう、一層の努力を続け、「磨かん共に」の精神をブラッシュアップしながら、研修や日々の実践からくる学びを活かし、今後とも学校、先生方を支援できればと思います。今後ともよろしくお願いします。

【調査研究報告　調査研究Bチーム】

研究テーマ

「探究的な学び」を支える教師の学び

研究の要旨

第４次長野県教育振興基本計画では、長野県教育の目指す姿を「個人と社会のウェルビーイングの実現～一人ひとりの「好き」や「楽しい」、「なぜ」をとことん追求できる「探究県」長野の学び～」と定めています。これまでも長野県の先生方は総合的な学習・探究の時間を中心に、子供が自ら問題発見し、解決に向けて追究する学びが連続していくことを大切にしてきました。

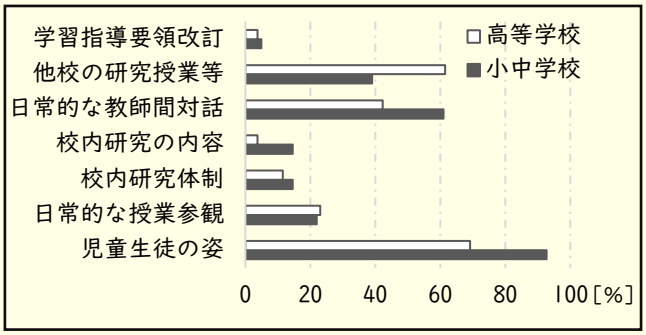
本研究チームでは、各教科等のねらいに向かい、子供が自ら問題発見し、解決に向けて追究する学びが連続していくことを「探究的な学び」と捉え、総合的な学習・探究の時間だけでなく、各教科等においても探究的な学びを実現しようとしている取組について調査を進めてきました。そして、児童生徒の探究的な学びを支えていくためには、職員間の豊かなつながりと教師の探究的な学びが大切であることが見えてきました。

越智（2023）※は、実践は、一人で生み出すというよりも、実践共同体の中で育まれ、共に切磋琢磨する中で磨かれるもの、と述べています。そこで、職員間のつながりが個々の教師にどのように影響を与え、児童生徒の探究的な学びを支えることにつながるのか、考えていきます。

１　教職員のつながりが個々の教師の探究を支える　～授業観の更新～

【１】子供主体の授業へと意識が変わったきっかけ

研修講座「総合的な探究の時間　基本」
「総合的な学習の時間　基本」受講者対象アンケート



「子供の学ぶ姿を振り返り、教えるのみの授業ではダメだと痛感した」「教科会で複数の教員で一つの授業を構想した時は、授業後に情報交換するようになり、授業観が変わっていった」という意見もありました。

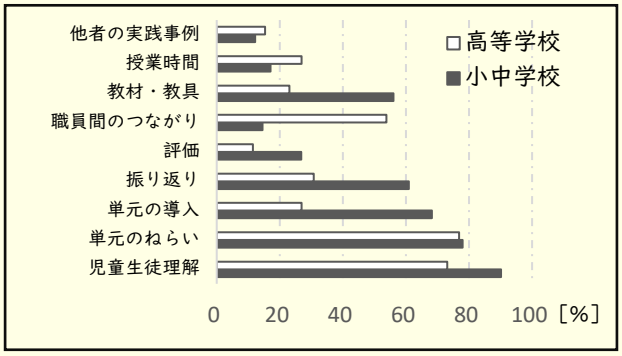
児童生徒の学びの姿をきっかけとして、授業参観や授業研究会などでの対話によって教職員がつながり、教師の授業観の更新を促すことが見えてきます。

２　教職員のつながりが教師の探究を支える　～単元等のまとまりを見通した実践を促す～

小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総則編には、「単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることを示した。」とあります（p.4）。また、資質・能力の育成に向け、教科等横断的な視点をもちつつ、学年相互の関連を図りながら各教科等の教育の内容を組織する必要があるとされています。

【２】子供主体の授業づくりで大切だと考えていること

研修講座「総合的な探究の時間　基本」
「総合的な学習の時間　基本」受講者対象アンケート



授業づくりにあたり大切にしていることとして「単元のねらい」「児童生徒理解」を考えている先生方が、校種を問わず多いことが分かります。単元のねらいを明確にして授業を構想することは、単元等のまとまりを見通すことにつながります。対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか等、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に取り組んでいることが分かります。

その際、教職員のつながりが充実していると「単元のねらい」「児童生徒理解」について多面的・多角的な検討が進み、単元等のまとまりを見通した支援や授業構想が行われやすくなると期待できそうです。

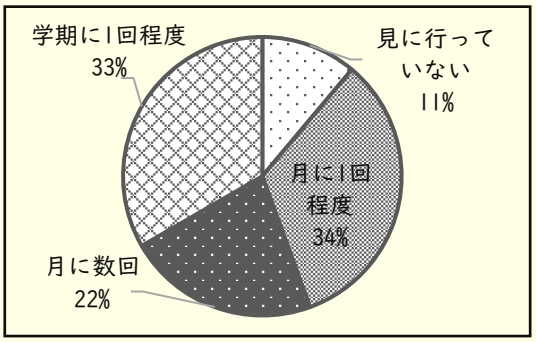
※越智康詞(2023)「組織改革の視点から見た『学級担任制』から『学年担任制』への転換の意味」『信濃教育』第1641号（令和５年８月）p.12-21

３　教職員のつながりが教師の協働的な探究を支える　～学校改革が進むＡ高等学校～

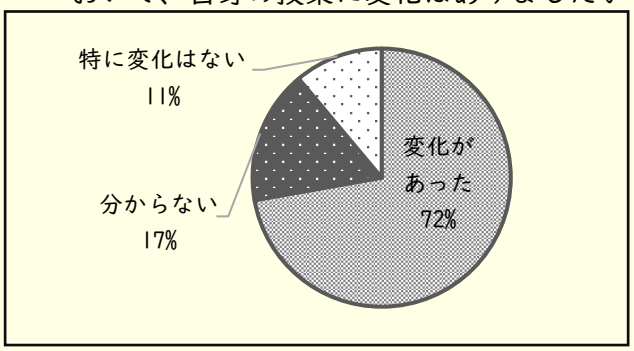
Ａ高等学校では、校内の先生の56%が、月に１回以上、他の先生の授業参観をしています【３】。５年前から学校全体で探究的な学びを推進しており、学校改革を推進していく過程で、校内の先生の72%がご自身の授業に変化があったと感じています【４】。

教師が協働し、改革を進めていったＡ高等学校の５年間を紹介します。

【３】校内の先生の授業を見に行く頻度



【４】全体で探究的な学びを推進していく過程において、自身の授業に変化はありましたか



５年前にＡ高等学校に赴任した校長先生は、「受け身な生徒が多く、自ら考える力をつけてほしい」と願い、学校全体で探究的な学びに力を入れることにしました。まず、校務分掌を見直し、係の役割を整理しました。そして、探究的な学びを推進する役割を学習指導係が担うと決め、係には各学年の先生が入るようにしました。

校長先生の願いに共感した係の先生方は、他校の先行実践を視察し、探究的な学びのあり方を探り、その過程で授業改善に率先して取り組みました。それによって生徒が変わり始めたことを感じた校内の先生方も、探究的な学びに力を入れるようになりました。

現在、教科の枠を超えて、授業づくりや生徒の学びの姿について語り合ったり、教科会で共通して使用できる教材を準備したりしているとのことです。

Ａ高等学校では、生徒の実態を基に管理職が示したビジョンとして、生徒につけたい力を明確にしました。係の取組を通して、次第に目指す生徒の姿やそこに向かうための授業のあり方が職員全体へ広まっていきました。係が協働して起こした探究的な学びの風は渦となり、大きく渦を巻く中で、職員のつながりがより豊かになっていったと言えそうです。

４　つながりが生徒の探究を支え、生徒の変容へ

Ａ高等学校は、地元企業や大学と連携した授業を実施しています。視察した先行実践から学び、「生徒が学校外とつながることができる環境を整えることが大切」と考えたからです。理数科では大学教授が関わる授業を実施し、獲得した知識や技能を活用して課題を解決し発表する場を設けています。

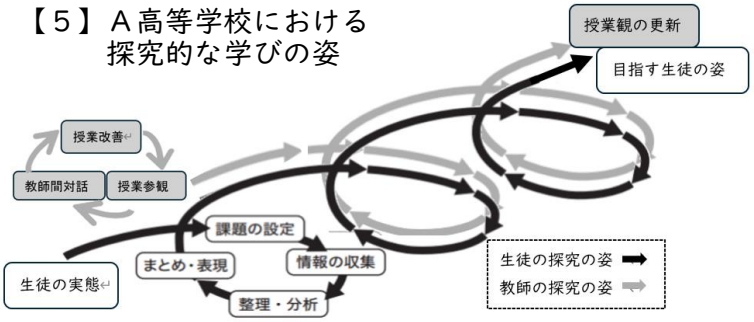
校長先生は、この５年間を振り返り「最近は人前で話すことに抵抗を感じる生徒は少なくなってきました。これまでより主体的になってきたと感じています。」とおっしゃいます。生徒の変化は進学率にも表れており、令和４年度末卒業生の約半数の生徒が国公立大学に進学しています。つながり合う教師に支えられた生徒が、多様な他者とつながることで、生徒の探究が支えられ、生徒の変容につながったのだと考えます。

教師が協働し探究的に学ぶ∽豊かなつながりの中で児童生徒が探究的に学ぶ

『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について（答申）では、「教師の学びの姿も子供たちの学びの相似形であるといえる。」とされ、教師自らが問いを立て実践を積み重ね、振り返り、次につなげていく探究的な学びが必要だとしています。

つながりが個人を支え、教師の協働的な探究が児童生徒の探究的な学びにつながっていくと考えます。

【５】Ａ高等学校における探究的な学びの姿



図「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説　総合的な学習の時間編」改

今年度は、子供の学びを支える教師に焦点を当てて調査研究を進めました。今後も、探究的な学びを推進している各校の実践に学んでいきたいと思います。

【調査研究報告　調査研究Ｆチーム】

研究テーマ：　「将来を見通した遠隔教育の土台作り」

【目　的】

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実の実現に向け、すべての生徒に対して多様かつ高度な教育に触れる機会の提供と、特別な支援が必要な生徒に対する学習機会の確保と支援を目的とした遠隔教育について研究を行う。

【内　容】

先進的取組を視察・調査

県内外で先進的に取組まれている学校（自治体）へ視察に伺いました。

長野県内

◆　**配信校**：穂高商業高等学校

◆　**受信校**：３校

◆　**教　科**：情報（３科目）

◆　**人員配置**：１名（配信側）　※受信校は、規定により１科目１名の担当が配置

県内は、教科「情報」における教科指導の充実を目的として遠隔授業配信が行われています。授業配信は、担当教員がメイン機で Google meet に接続し電子黒板に表示するとともに、生徒が各自の端末で meet に接続して受講しています。配信教員は、スライド等を活用して授業を進めるとともに、TFabTile を活用し、受講者の画面を共有していました。

授業の様子

効果と課題は以下のとおりです。

効果：専門の先生に教わることができる。
スキルが社会に出てからも役立ちそう。（遠隔会議など）

課題：生徒と教師の対話や生徒間のグループワークの難しさ。
生徒画面を遠隔操作することができないため、場面に応じた十分な支援ができない。
多人数の授業では、一人ひとりに十分な対応ができず、進度に差が出てしまう。

北海道遠隔授業配信センター

◆　**配信校**：北海道遠隔授業配信センター（T-base）　北海道有朋高等学校内に設置

◆　**受信校**：31 校（令和５年度実績）

◆　**教　科**：８教科（32 科目）

◆　**人員配置**：専任 23 名　※受信校は、規定により配置

北海道では、少子化の影響により道立高等学校の小規模化が進み、教員配置数や設置科目数の減少、多人数による協働的な学習機会の減少が課題でした。

そこで、これらの課題に対応するため、令和３年（2021 年）４月、北海道高等学校遠隔授業配信センターを開設し、「夢は、地元でつかみ取る」のキャッチフレーズのもと、遠隔授業配信及び進学講習などに取組、小規模校の魅力を図っています。令和５年度には、31 校、779 名の生徒が受講しています。

音楽の授業配信の様子

効果と課題は以下のとおりです。

効果：生徒の進路希望に応じた科目を開講することができる。
同一エリアの学校同士が連携をして、授業を補完し助け合うことができる。

課題：遠隔授業の配信を希望する学校は増加傾向にあるが、予算的制約により全ての学校に対応することが難しい。
個々の生徒の質問に対して個別に対応することが難しい。
欠席の生徒に対する授業の補填が難しい。

高知県遠隔授業配信センター

◆ **配信校**：高知県遠隔授業配信センター
高知県立岡豊高等学校分室として教育センター内に設置

◆ **受信校**：16 校（令和５年度実績）　※遠隔配信システム整備校は 19 校

◆ **教　科**：４教科（16 科目）

◆ **人員配置**：専任 10 名

高知県中山間地域では、生徒数の減少に伴う高等学校規模の縮小化により、開講できる科目に制限がかかり、生徒の進路希望に応じた選択科目の設置やきめ細やかな習熟度別講座の展開が困難な状況にありました。また、多人数との交流や協働的な教育活動が少ないなど、小規模校の高等学校教育の質を維持するために課題がありました。

そこで、平成 27 年度から遠隔教育における学校体制の構築と生徒の能動的な学習を支援する学習指導方法の研究を実施し、令和２年度より、高知県教育センター内に遠隔教育配信センターを設置し、単位認定を伴う遠隔授業の取組みが始まりました。令和５年度には、16 校、136 名が受講しています。また、進学補習や公務員試験対策、英語検定対策やキャリア教育講演会も実施しています。

遠隔授業の効果と課題は以下のとおりです。

効果：生徒の習熟度に合わせて授業を進めることができる。
同時配信授業により一人の受講生では実現しづらい対話的、協働的な学びが実現できる。
専門教員からの直接指導により、より深い学びが実現できる。

課題：一人ひとりへの対応の難しさや実習（実験）の配信の難しさ。
自己主張の少ない生徒への対応が希薄になりやすい。
授業時間外に気軽に質問に行くことができない。

配信スタジオ

【検討事項及び次年度の取組】

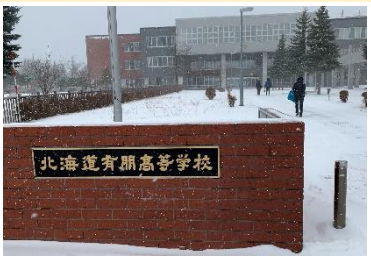
検討事項

◆ 目的の明確化

◆ 組織・体制・運用

◆ 導入コスト及びランニングコスト

次年度の取組

◆ 遠隔授業の方向性について議論

◆ 試験的実践